

白金霞

八月号



平成25年8月発行 第30号

白金葭定例会案内

九月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室)

兼題: 十五夜、胡麻

十月七日(月) 武蔵野吟行(箭弓稲荷と古見百穴)

東武東上線東松山駅 10時 10分集合(池袋9:15発)

十月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 (そば治二階(昼食込))

兼題: 落花生、御命講

十一月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室)

兼題: 立冬、朴落葉

十五夜、胡麻の参考句 (九月二十日分)

ふたりしてちがう十五夜見ておりぬ

一満月一韃靼の一椿円

一瞬の名月に雲岩戸めく

万骨を野晒にして今日の月

十五夜に寝静まる屋根続きけり

十五夜の鼻先にある葉壇

名月や人の名利も塵のごと

ごま和へのごま一粒も僧の汗

君胡麻搗れ我搗鉢を押さへゐむ

寂れたる駅前広場胡麻を干す

鶏が横切り胡麻を干す老婆

山本悦子

加藤郁平

梅木酔歩

南喬穂

山菅恵子

鹿又英一

河野胆石

美濃部多津子

小澤實

吉田飛龍子

山田哲夫

月例会会報 (13 / 8 / 15 9名 蓮見舟吟行)

飯田孝三

怖^{おつ}怖^{おつ}と舳先紅蓮白蓮^{はらち}

蓮叢出で凱風のエンジン音

猪の鼻もありたる象鼻杯

水煙草煙管もありて象鼻杯

従兄先生兄も征つたまま蟬の穴

増田陽一

青鷺のひとつ渡りて沼静か

破れ傘の如く鵜のゐる終戦日

玉音と蟬遙かなり蓮見舟

荷葉酒の宴にとび込む銀やんま

蓮見舟船頭はもと舟大工

増田悦子

私乗れば少し沈むか蓮見舟

葉にとまる蜻蛉はなるる蓮見舟

蓮の茎混みあひ蜻蛉見えかくれ

光成高志

象鼻杯盃造り花鋏

蓮の花竿を操る老船頭

四阿の煙草の煙やいと花

終戦記念日手賀沼の橋渋滞中

バイアスロン練習中や夏つばめ

光
み
ち

仲元興正

先をゆく子どもばかりの蓮見舟

三人も隔てて注ぐ象鼻杯

青鷺の一羽空占む終戦日

盆の車渋滞の橋舟潜る

切り取りし蓮葉萎れる残暑かな

松村幸一

佐藤宏之助

一管を伝ふ甘露や蓮の酒

光り吐きつつ花が来る蓮見舟

混み合うてはちす肩打つ舟路かな

生きること飽きても八月十五日

見つべきは見たり八月十五日

夏草の中に一条獣道

炎天下真直ぐの道ひた歩く

舳で蓮を掻き分け蓮見舟進む

蓮沼を抜けエンジンを轟かす

廃橋の欄干葛の絡みあて

とりあえずコップに金魚祭り果つ

フランスのコップは桃色理髪店

天の川佐渡の真下で鰯が釣れ

白布を被って行けと広島島

銀漢をつなげて出たは蜚かえ

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 一管を伝ふ甘露や蓮の酒

4 玉音と蟬遥かなり蓮見舟

4 棹でゆく静寂し^{しま}の時の蓮見舟

3 蓮見舟船頭はもと舟大工

3 手賀沼の精霊とんぼつるみをり

3 青鷺の一羽空占む終戦日

2 象鼻杯盃造り花鋏

2 青鷺のひとつ渡りて沼静か

2 エンジンの唸る中にて終戦日

2 怖^{おっ}怖^{おっ}と舳先紅蓮白蓮^{はうす}

2 杭に立つ川鵜の黒さ終戦日

2 破れ傘の如く鵜のある終戦日

2 手賀沼の秋風に会ふ坂の町

2

蓮沼を抜けエンジンを轟かす

宏之助

2

沼尻の田圃に來れば雪加鳴く

高志

2

荷葉酒の宴にとび込む銀やんま

陽一

2

廃橋の欄干葛の絡みゐて

宏之助

2

象鼻杯母衣の上まで杯上げて

高志

2

猪の鼻もありたる象鼻杯

孝三

1

炎天下真直ぐの道ひた歩く

宏之助

1

炎天下真直ぐの道ひた歩く

宏之助

1

蓮の花竿を操る老船頭

敦子

1

見つべきは見たり八月十五日

幸一

1

生きること飽きても八月十五日

幸一

1

蓮見舟蓮見のあとを走りけり

興正

1

蓮叢出で凱風のエンジン音

孝三

1

蓮浮葉水三角にたまりけり

興正

1

天の川佐渡の真下で鰯が釣れ

啓泰

1

切り取りし蓮葉萎れる大暑かな

みち

1

切り取りし蓮葉萎れる残暑かな

みち

1

私乗れば少し沈むか蓮見舟

悦子

1

終戦記念日手賀沼の橋渋滞中

敦子

1

従兄先生兄も征つたまま蟬の穴

孝三

1

盆の車渋滞の橋舟潜る

みち

1

先をゆく子どもばかりの蓮見舟

〃

1

蓮の茎混みあひ蜻蛉見えかくれ

悦子

夏草の中に一条獣道

銀漢をつなげて出たは蜩かえ

稲の香や日は平らかにかげらずに

水煙草煙管よりどり象鼻杯

水煙草煙管もありて象鼻杯

四阿の煙草の煙やいと花

葉にとまる蜻蛉はなるる蓮見舟

光り吐きつつ花が来る蓮見舟

白布を被って行けと広島忌

舳で蓮を掻き分け蓮見舟進む

混み合うてはちす肩打つ舟路かな

バイアスロン練習中や夏つばめ

フランスのコップは桃色理髪店

とりあえずコップに金魚祭り果つ

三人も隔てて注ぐ象鼻杯

一句鑑賞

玉音と蟬遙かなり蓮見舟

玉音放送を蟬の声とともに聞いたあの日、終戦日、いや敗戦日は遙か昔になってしまった。蓮見舟に乗って蓮見に向う往路の感慨。或は蓮見を終えてエンジン音の中を帰る沈黙の中での感慨。「遙かなり」は蟬の声が沼の岸辺から遙かに聞こえ来ると一読とつたが、「玉音と蟬」と

宏之助

啓泰

興正

孝三

敦子

悦子

幸一

啓泰

宏之助

幸一

敦子

啓泰

〃

みち

光成高志

陽一

なっているの、先述のように終戦日のあの日の記憶をよみがえらせての感慨と思います。終戦記念日の蓮見舟はかかる追悼の場を提供してくれます。

荷葉酒の宴にとび込む銀やんま

陽一

「蓮を見て来て荷葉杯象鼻杯」(山田圓子)を後述してあるが、蓮の葉で飲む酒即ち荷葉酒を楽しんでいる宴に銀やんまがとび込んだ。あらまあ銀ちゃんが来ちやつた、まあどうぞというまなく飛びすぎちやつた。宴と書いてあるから、宴たけなわに飛び込んだに違いない。

怖おつ怖おつと舳先紅蓮白蓮はちす

孝三

「舳で蓮を掻き分け蓮見舟進む」(宏之助)と紅蓮が現れ、また進むと白蓮が現れる。蓮叢の中から怖ず怖ずと舳先に現れる。終戦記念日のこの紅蓮白蓮は戦没者の御霊に違いない。

青鷺の一羽空占む終戦日

みち

蓮見舟が出て沼中央の手賀大橋を潜り、蒲叢に沿って進んでいる時、前方に青鷺が悠々と飛びすぎた。急に現れた。羽を一杯広げその端部が黒く縁取られていた。一羽であつたけれど、空を独り占めした如くに思われた。B29の大きな翼が通り過ぎていった記憶が甦った。「あつ白鷺」という声が聞こえて一瞬沈黙が流れたのはその記憶が呼び覚まされた瞬間だったのだ。

手賀沼の精霊とんぼつるみをり

興正

精霊とんぼは、盆の頃に飛ぶ赤とんぼを云う。祖霊がこのとんぼに乗って帰ってくるのだ。その精霊とんぼとて子孫を残すための営みは、人間様の勝手な思いにかかわらず行われる。手賀沼の蓮見に来ている雅客さまよ、そんなことは知ったことかよとつるんでいるのである。

見つべきは見たり八月十五日

幸一

平家物語の平知盛の「見るべき程の事をば見つ。今はただ自害せむ」とて、碇を担いで壇の浦に仰向けに入水した歴史を踏まえての、ちゃんちゃんこの句は、昨年暮れに投句され、私が取って鑑賞した。今回の「見つべきは見たり」の措辞は、「碇知盛」の心情になぞらえて、終戦の八月十五日に私は碇知盛になったのだ、その後の人生はこの世とは思われず、うたの世を生きてきた。この世のまことの断絶がかの八月十五日である。うたのまことに居られる幸一さんの真摯な告白ではないだろうか。

炎天下真直ぐの道ひた歩く

宏之助

一読、宏之助さんの句とわかった。故に選んだわけではない。炎天下の真直ぐの道をひたすら歩くのは作者である。遍路姿の作者である。所用で歩いているわけではない。己のために歩いている。ひた歩いている。そこに人生がある。俳句修行のために歩いていると理に走ると途端に面白くなる。君子は己のために歩くのだ。

一句鑑賞 x (29号分)

武者昭七

深海の如くに夜のプールあり

陽一

明るく陽気な昼のプールの裏側が秘めている夜のプールサイドの不気味な「素顔」をとらえて見事。さざ波ひとつ立てず静まり返った昏い水の分厚い深みに、光も届かぬ「深海」をみたのは作者の鋭い感受性のせいでしょう。何よりも「深海」という昏い重たい言葉の響きが妖しいイメージを掻き立て昼のプールにはない確かな存在感を突き付けてくる。さまざまな語りがいうように実は水は怖ろしいものののだ。地面をわずかに掘りくぼめただけの水たまりにも水の魔性が潜んでいる。夜のプールは深海のように深く黙してそれを語らないけれど。それは水の「孤独」でもある。

百姓のほったらかしの甜瓜

高志

真桑瓜はメロンの仲間だというけれどメロンのイメージが急上昇するにつれて逆にさえないものになってきてしまったらしい。

まくわうりどんな味かと母に問う

正美

とあるとおりどんな味かを知らぬ者、忘れてしまった者もおおいだろう。作者のように作り手にさえ「ほったらかし」にされてしまった瓜に同情の目を注ぐのは甘味にも縁遠かった昭和世代だからだろうか。ああ、もったい

ない！あゝかわいそうに！

虎の尾の日に染む白さ佇めり

みち

この花、道端でも花壇の縁でもよく見かける。恐ろしげな名前に対してその花は可憐である。白色のほか桃色すみれ色などがある。「日に染む白さ」で一旦休止して花の白さの鮮やかな印象をいい、「佇めり」と続けて花に注ぐ作者の愛憐のこころをいう。

一句鑑賞（29号分）

飯田孝三

プールぢゆう蛙泳ぎの授業中

みち

句会添削句は「プールぢゆう蛙泳ぎの授業かな」。それはそれで端整な仕上がりだが、原句を取り上げてみたい。プール「ぢゆう」は「中」。「充」に通じる。プールいっぱい、一面の意。授業「中」は「最中」、真盛り。「ぢゆう」、「中」と連ねる字面、口誦が相刺、四濁音もあつて、プールの賑わいが手にとれ、泳ぎ手の手捌き、足捌きのさまが目に見える。「蛙」泳ぎ（平泳ぎ）がいい、他の泳法ではこうはいかぬ。四肢の屈伸が見え、その間合いがいのち、即ち臍と知る。やつぱり俳句は蛙か。むべ詩心、閃きの賜物だろう。「授業中」の動名詞的表現がもたらす映像の動的効果が見どころ。「ぢゆう」、「中」の用字使い分けも納得。

ごろごろとたてよこにあり甜瓜

悦子

畠の隅か、台所の土間か縁の端か、まるで甜瓜は置き忘れ。昭和も三十年代頃までは（大都市を除けば）よく見かけた光景である。「ごろごろ」「たてよこ」の無造作ぶりが、目に物見せて面白い。当今は「甜瓜」といったって知りやしない、売ってもいない。〇〇メロン、△△メロンとやら、手間隙かけ、育て、出荷するまでの気配りは、およそ想像の外のようだ。甜瓜の自然の味がなんとも懐かしい。故郷のはらから、友垣の顔が目に見え。「たてよこに富士伸びてゐる夏野かな」（桂信子）より、銜いも拵えもない。ちなみに信子句、広々とした裾野から夏富士の全景を見上げる図と思いきや、上空から鳥瞰する景だという（長谷川權）、腑に落ちぬ。いやはや、ついつい余談。

甜瓜昭和と吾等減びたる

陽一

昭和は長い、曰く激動の時代。されど今や、戦前はおろか、戦中、戦後の焼跡を知る者は、日々に少数。国民の多くは、甜瓜の名も味も知らぬ。戦中、戦後復興期に青少年期を過ごした「吾等」にとつて、動員作業やあそび疲れで腹へらし、汗まみれで口にしたほのと青さが匂う、甜瓜の瑞々しさは忘れ難い。甜瓜は昭和の味である。さりながら、蓋し今は昔。

百姓のほったらかしの甜瓜

高志

末生りの真桑瓜は、極度に味がおちる。畠の片隅に放つぽられ、見向きもされない。往時、よく見かけた晩夏の瓜畠風景である。そんな真桑瓜に目を注ぐ。いづれ土に還され畠の肥やしか、家畜の餌にされただろう。ナニ、子猪の餌？フーム。とまれ、近時、フレーム栽培の改良種ではこんなことはありえない。昭和の産土を思い、げに瞬きの間の感を深める。「デパ地下ノドコ見テモナイ甜瓜」(三泥)。(選句結果欄掲載順) (平25・08・09)

ハガキ句三十一報 (07/11/7)

冬雲雀朝の菜園見まはれば

高志

名月や雲に遊びて松葉町

哲也

人肌の杯もてあそぶ無月かな

敏子

十五夜の出でて没日の嚇々と

春美

道の辺に瞽女の墓あり翁の忌

たか子

夜気ひそか青き棗を頂きぬ

多佳子

持ち寄って秋の七草揃ひけり

白木

新しき友得て七つ棗の実

和子

桶のまま句座の真中に藤袴

良き顔の揃ふ良夜の一会かな

馴れぬこととして身のきしみ行く秋ぞ 妙子

送電線ゆるき弧を描く無月かな

孝三

飛行船の影に入りたる花野中

孝三

葡萄の房まるごと口中アフロデイト

飯田孝三

はがき句報三十一号管見

飯田孝三

冬雲雀朝の菜園見まはれば

高志

「見まわれれば」がうまい。その呼吸は、子規の「柿食へば」に敵い、一瞬を捉え、かつ、間合いがこもる。

ゆつたりしたリズムは、上五へかえり、大空を深々と抱える。晴れやか、雲雀の声ひびく小春の空である。「朝の」

がさりげなく、利いている。

人肌の杯もてあそぶ無月かな

哲也

「人肌」の温もりと「無月」の照応がにくい。節酒、無聊の思いか。「盃」ならぬ「杯」は、象形にかかる作者の美学だろう。白雄の「人恋し」に更に艶を加える。

なめらかな調べにあつて母音アア、ウウ、アアの連音、とりわけ中七下五を繋ぐ「くぶむ」が、三濁音の韻と

あいまって無聊を深める。

名月や雲に遊びて松葉町

高志

「松葉町」は実在の名だろうか。ともあれ、月を浮か

べる松のたたずまいや梢のさまが目に見える。「や」がぴたり。「て」がさらりとぬける。

十五夜の出でて没日の嚇々と

敏子

満月は早々に昇る。中秋、真東に月は澄み、日はまだ懸り、嚇々と真西の空に沈む。没日の赫さが目にしみる。人麿・蕪村は、初春の天地を東西にふり返ったが、作者は中秋の日月を見返る。前者は望見の遠眼差し、後は直視、距離感が消える。「嚇々と」を敢えて言うのは、そこが眼目。前は情趣、後はより精神性が強い。く「て」が時間の推移を伝え、もたれない。渉る日の軌を暗示する。没日に何を惜しむのだろう。ただ、「出でて」の「で」は不要ではないか。字面が重くなる。

夜気ひそか青き棗を頂きぬ

春美

棗の実は思いの外小粒。「ひそか」に納得。「青き棗」が印象的である。「ひそか」に「ぬ」と呼応、「頂きぬ」に秘める思いを収める。力行音とりわけ「き」二音の韻きに思いの深さがこもる。

道の辺に瞽女の墓あり翁の忌

敏子

偶々、芭蕉忌日の旅の囑目だろうか。上中下、つき過ぎないか。虚子「春遍路」の先蹤があるのが損。「道の辺」は道端より広がりを感じさせる。

持ち寄って秋の七草揃ひけり

たか子

「揃ひけり」が外連味なさがいい。めでたい。

新しき友得て七つ棗の実

多佳子

「七つ」はめでたい。「ななつなつ」の弾みがいい。桶のまま句座の真中に藤袴

白木

情景が見える。「真中」できめる。

良き顔の揃ふ良夜の一会かな

和子

「良き顔」が見えるようだ。「一会」は「二期一会」のそれだろう。去り難てに散会したにちがいない。

馴れぬこととして身のきしみ行く秋ぞ

妙子

「ぞ」に実感。

送電線ゆるき弧を描く無月かな

妙子

「描く」は冗語。以上、妄言多謝。

先のファールブル会ではお世話になりました。歓談できず残念でした。当日の「庭石の裏より聞こゆ鉦叩」はい。さりげなく深い。脱帽。貴句は、この頃、とみにぬけている。12月16日は、また、よろしくお願いします。(こちらの仲間の句)

隊列を外れ叩かれ祭馬

中村芙路子

大輪の菊を咲かせて再婚す

水野 清子

百菊のなかの一つの真白なる

田中 勝

三四郎池に突つ込む冬の鵲

石川シゲ子

(平成19・11・30)

葡萄の房まるごと口中アフロデイト

孝三

葡萄の房まるごと口中に押し込むと、口の中はまるでア

フロディテのようである。アフロディテが此句の膺である。簡単に言う、ギリシャ神話の海の泡（アフロス）から生れた美と愛の女神である。ローマ神話ではヴィーナスに当るから、ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」の絵を思い浮かべるであらう。口をもぐもぐさせながら、耽美的世界を脳味噌で味わっている様にかすかなユーモアが漂って来るではないか。これは高度な諧謔。

(H. 25, 8. 10 高志記)

ところで、「はがき句管見」をつづりながら、高志さんと敏子さんの句について、日頃、感じているところを簡単に述べてみたい。

(最近の高志さんの句について)

誓子の句の特質は、即物的、硬質感、マンライク「俳句」である。抑情、黙示、自持が際立つ。有名な「木枯」や「こころの帆」などよりも、初期の「車輪来て止まる」「溶鉱炉」に誓子の面目を見る。「天狼」本流を自認する主宰クラスより、高志さんの句の方が誓子の正統を受け継いでいると、思うのだが。最近の作は、さらに進化、新境に入った感じがする。

多くの記憶する好きな句から、百舌鳥句会の終り頃以後の作十句を限り、左に掲げる。

二ん月や榛の木にある風の形
鼈を食つて春夜の別れかな

筍の籠に正立倒立に

来し方は白朝顔に抜けにけり

白鳥の羽を拾へば汚れをり

白鳥が八百飛来本埜村

狐雨通り過ぎたる秋の声

土筆立つ面影塚の正面に

姨捨の坂の途中の枯柏

水中を伸びて此の世の蓮の花

終四句は、直近の句である。「秋の声」の幹旋、「正面

に」、「途中の」の措辞、「水中を伸びて」「此の世の」の

修辞は、さりげなく、不動。自然自在の風があり、深い。

抜けているのである。

(最近の敏子さんの句について)

敏子さんの句には、綾子の「普段」ぶり、立子の「率直」を思う。勿論、より今日（現代）が息づいている。

天性の詩があり、俳諧がこもる。出っぱらず、奥が深い。

同じく、百舌鳥句会終期以後から十句だけ掲げる。

鼻と四肢括られて猪戻りけり

蟪蛄の身籠もる腹を連れ歩く

県道を横切るつもり大毛虫

客人に日の句ひある風炉手前

爪先の影踏む舞ひや後の月

鉄瓶の小包届く無月かな

焼諸の熱き釣銭渡さるる

昆虫記開いてありし春の昼

納税期隣の犬の賢くて

会場に沸き立つ拍手五月来る

「県道をく」の「つもり」がうまい。この句あたりから、一段の進境を覗う。「客人に日の匂ひ」、「爪先の影踏む」の機微、「鉄瓶の小包」と「無月」響き合い、「ありし」の自然。言わず、蔵するものが深い。焼諸の「熱き釣銭」また然り。この句境の類例を知らない。「納税期」は、又、別の方向だ。ごく最近に、新たに二つの傾向を感じる。一は「納税期」や右掲外「白鳥帰るく」「願はくはく」など、機知が覗え、軽妙。二は「舟に身を委ね八月十五日」「昼までに戻る八月十五日」のように（季題の重さゆえだろうか）あえて胸うちを読者の洞察に大幅に委ねる。先の吟行句「蟬の穴結んでみれば七つ星」は一の系だろ。 (H. 19・9・18 飯田孝三)

お便り広場（到着順、敬称略）

「白金葭」七月号拝受いたしました。充実すると共に格調高い雑誌になりつゝあるやうに感じます。ビックサイトブックフェアに参加されていますね。次回に無料入場券が二枚？手に入りましたら送ります。近頃はチャンとした本を少しは読むやうになりました。そして構造の

本も（今更ですが）わからないことだらけです。時折構造の後輩達と会ってシゲキを受けたり、年齢差を感じたりしています。元氣でいます。皆様の益々の御活躍を祈ります。 (7. 27 小山陽也)

おくれればせながら、暑中見舞い申し上げます。終戦日の蓮見舟の吟行会ご案内ありがとうございました。万障繰り合わせて参加させていただきました。こないだ「平野ひろし」さんと枕をならべて、熊谷支部に参加して来ました。ひろしさんから、このように一緒に泊りたいなど言うことは、めづらしいことなので、これが最後と思ったのかも知れません。 (平. 25. 7. 31 佐藤宏之助)

白金葭楽しく拝読しております。毎号小生の拙い文など掲載して頂き大変恐縮しております。三好達治はそろそろ打ち止めにしようかと思っております。貴誌の益々のご発展を祈ります。 (平. 25. 7. 31 武者昭七)

残暑とはいえ、盛夏を凌ぐ暑さですが、お元氣で過ごしていると思います。七月例会の後選鑑賞の駄文をお送りします。なにやら、異常気象が年々昂じる感じですよ。とにかく暑い。ご夫妻ともどもどうぞご自愛のうえ、ご精吟なされますよう念じあげます。蓮見吟行を楽しみにしています。草々 (平. 25. 08. 10 飯田孝三)

拝啓、光成様 毎月の白金葭誌の御送付メモまでお添え下さるお心遣い誠に有難く存じ上げます。お礼を申し

上げるのがすっかり遅れまして申し訳ございません。私こと、今年に入って体調が悪く野火月例会（私は不忍句会）も欠席投句のみとなり、世話役の〇氏にお手数をかけている次第です。野火は今年五月800号を迎え皆様大変に御多忙を極めてをられる処申し訳ないことでした。七月末で予定の検診が終了、やれ／＼のところ、昨夜歯の一本が折れ、今日は12時10分に谷中の歯科医院に予約をとりました。走り書きになって申し訳ありません。

八月八日はアクロス句会飯田様も御出席頂く予定ですが、白金葭の皆様も大切な蓮見舟吟行ですね。御健吟拝見を何より楽しみ致しております。御執筆陣も多忙にそして何より高志様の編集ぶりと御句の冴え渡りぶり、今は奥方様だけでなく高志様のファンになりました。

酷暑もぶり返して参りました。もう一息呉れ
〃も
奥様共々お体の御無事をお祈り申し上げます。

八月五日

白

光成高志様

小澤房子

涼風をおとけします。北海道新栄の丘（水彩画）
くれぐれもおからだおいとい下さい。2013盛夏

（H 25・7・27 徳原房代）

受贈誌（八月号）

電車まう来ぬ真壁駅桜散る

（飛行雲67号）

駿河岳水

宮神輿漢^{おと}の津波押し出せり（彩20句集）

平野ひろし

梅漬るダンベル重石代りとし（〃）

鈴木 祐

英字新聞押へに青き榎櫃置く（〃）

宮川喜代子

百間のノラを呼ぶこゑ虎落笛（〃）

村瀬愛子

水温む三拍子にて米を研ぐ（〃）

山本力枝

がうがうと雪庇の下を雪解水（〃）

吉村ふみえ

早春賦口遊みつつ朝厨（〃）

和田迪代

蟻^や何も搗^もみず大水車（あすか8月号）

山尾かづひろ

こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲夏号（67号） 駿河岳水主宰抽出

光成高志

霾ぐもり砂町銀座人通り（25号）

光成高志

彩五月（11号） 平野ひろし主宰抽出

俳窓評論纂

〃

山田圓子さんの第三句集「難波津」が出た。平成十四年（二十一年）までの八年間の千句あまりの大部な句集である。後の三年間の句は自選とか。小海線、清里、土肥、殿ヶ谷戸庭園、伊吹山、詩仙堂、蘆花旧居、富士山、熱海、野川公園、子規庵、大國魂神社、山梨勝沼、高幡不動尊、富士ビューホテル、猿橋、善光寺、諏訪湖、道修町、上野牡丹苑、隅田川、靖国、芦屋霊園、亀戸天神、

神代植物公園、那智の滝、万博記念公園、安房の国、江ノ島、東京農工大、大阪御堂筋、羽子板市、新島、箱根、強羅ホテル、浜離宮、初島、父島、河口湖山荘、草津温泉、余呉湖、天城公園、巾着田、伊豆山、大内宿、袋田の滝、仙石原、津山、越後、佐渡、明治神宮、阿波、渡良瀬、長崎、仙台、妙義山、ボロ市、鳥取砂丘、八甲田、吟行されたところを抜き出すと途中までも以上のように切がない。境涯俳句の骨が通っているが、読んで行くうちに、写生句の良さが滲み出る。句集を読むのは、我慢して親しまなければ、良さが分らない。

蓮を見に来て荷葉杯象鼻杯

雨水今日吾八十九誕生日 (平 19 年)

蔓伸びて豌豆の花咲き出せり

竹林に夏鶯が響くなり

青嵐大竹林を抜けて行く

塩辛蜻蛉岩に蹲ひ温まる

塩辛蜻蛉の句、私も佐久平の春日馬事公苑の池で見た。正直に書く。(塩辛蜻蛉翅伏せて岩頭に)というのがそこで書きとめた私の句。岩に蹲ひという言葉は浮んでなかった。温まるもそう。圓子さんの句が温かい。見たままでなく、自分の実感を書いて居られる。

寒明けや府中多摩川風のだ

孫曾孫卒寿祝へり遅日哉

兜虫死んでも兜光りある

立秋や七夕さまと重なりて

稻稔り案山子が斜に立ってゐる

高きより青松虫が集くなり

銀杏を拾ふ手元に落ちて来る

烏瓜蔓の強さよ引けば来る

山茶花は高所に咲きて花散らす

朝戸繰る飛生鼠眠り覚まし飛ぶ

飛生鼠はむささびの当て字であろう。

赤松に夏の夕日の射し昇る

庭園にパンパスグラス靡きけり

パンパスグラスは我が俳誌の名である。「庭園に白金葎の靡きけり」と同意。「われら俳人白金葎は風の旗」(石原透 H・11)を意識して、白金葎は俳人の旗に相応しいと思い名付けた。「靡きけり」は白金葎の本意に叶う。本誌の表紙の写真がその静止画である。

蛇足を書いてしまつて恐縮ですが、削除せずに進みます。圓子さんの奥様がご病氣になられてそれが、気がかりで左のような句を作られている。

妻病めば心鬱なり梅雨に入る (平 19 年)

妻病んで葡萄美味しと食べにけり (II)

妻病めばひと日が永し秋の暮 (II)

病む妻に目出度くもなし母の日は (平 20 年)

我が家鬱世も不安なり年の暮 (II)

初春や病院にゐて妻米寿 (平 21 年)

年老いし妻病む不安目借時 (II)

敬老日妻は米寿で鯛戴く (II)

燦々と妻は米寿の柚子湯する (II)

圓子さんはあとがきに現在のこと過去のことを書かれておられる。ご自身は九十五歳であられる。現在までの三年間の句をお持ちであり、この調子にて、お元気で作句され、第四句集を上梓されることを念じ上げます。

三好達治を読む vi

武者昭七

さるすべり

さるすべり

くさのいほりの戸に咲きて

ふたつなき日のはるかなる

ながたまづさも灰となる

(「駱駝の瘤にまたがつて」)

さるすべりは盛夏のころから初秋にかけて、よく茂つて楕円形の葉をつけた枝先に、ちじれたような紅色の小さい花を房のように付ける。涼やかな風にゆらいではら

らと花の散るさまはなかなか風情がある。花期が長いので「百日紅」ともいう。

「くさのいほり」は粗末な住まいのこと。咲き誇るさるすべりのわきのささやかな住まい。そのたたずまいが住み手の閑雅な心境を伝えている。「ふたつなき日」は今は二度と立ち返るすべもない愛の日々。「はるかなる」と重ねて遠く過ぎ去ったあの日々への深い哀惜の思いをいう。「たまづさ」は手紙・たよりの意味の雅語。かつて交わし合った恋の形見であらう。それをいまさるすべりの花の散りしく下で焼き捨てるのである。「な」は汝の意味の二人称。

「さるすべり」と冒頭に重々しく五音をすえ、以下七五調を繰り返して流麗典雅な短詩となっている。かつて恋人のたよりを「ふたつなき日のはるかなるたまづさ」というあたりは、払い捨てたはずのその遠いおもかげの今もなお時々胸に迫るものがあることを告げている。「さるすべり」はその象徴である。最終行の突き放した言いかたに強い「断念」が働いている。

芭蕉のかるみ以後 (28)

光成高志

寛文十二年芭蕉は二十九歳、京より故郷の伊賀上野に

帰り、「貝おほひ」を兄の家の釣月軒において自ら書き、これを天神社に奉納して江戸へ下った。「貝おほひ」の序文、判詞に言う。「小六ついたる竹の杖、ふしぶし多き小歌にすがり、あるはやり言葉のくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、(中略)小うたにも予がころざす所の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、当所あまみつおほん神のみやしるのたむけぐさとなしぬ。(貝おほひの序文)今こそあれ。われも昔は衆道すきの。ひが耳にや。(二番の判詞)うき世五十年。一寸もまだのびぬ。花の枝咲までのあひ遠なれば。先づ目の前の晩鐘寺の。けふの花見こそたうとけれ。(八番 伊勢のお玉は。あぶみかくらかと。いへる小歌なればたれも乗りたがるハ。断はりたるべし。(十七番 京上臆に。ほのじハ。たれもすき歟の。かねがねのぞむ事なれど。稲のとのを。持たれバ。我妻ならぬ妻なりと。先^{まう}此恋ハさしおくて田^たの。(十八番 温^{うん}のめと(略)。実^{まじ}にあすをもしらぬ。身なれば能^よき亭主ぶりも。うれしくて。(十九番)なま中しぐれハ。いやよ。君がなミだの。雨の。しつぽと。ぬれかけ道者を。(二三番)」

なんと掛詞や縁語の多いことか。卑猥な連想を誘うような表現を危なかつしいところできつと引上げている。洒落の呼吸が絶妙である。源氏物語や古今集などの古典

をなんとなくまく洒落のめしていることか。このような句合せの形式は、北村季吟(明暦二年)の先例があるけれども、その判詞は術学的、権威的で面白くないのに比べ、宗房の判詞のなんと面白いことか。リズムだつて、その時代の小歌や、はやりことばの拍子を損なわないように、句読点を独自につけているではないか。これは、寛文という時代背景を鋭敏な感受性でとらえた立派な文芸作品だ。長い戦国時代が終り、つい此年から三十五年前の島原の乱を最後に戦乱の世は終わりを告げており、学問、芸術の分野では遅れて戦国時代のような疾風怒濤の時代に入っていたのだ。憂世から浮世となり、浮世狂いの自由を得たのである。封建時代の抑圧から自由な場所と言ったら、傾城町しかない。城を傾け国を滅ぼすという色香をもつてする遊里である。時代全体に遊蕩気分がみなぎっていたのである。貨幣経済の進展に伴う新興町人の台頭もこの時代であつた。貞門から出発した宗房の禅学、歌学、漢学、謡などの独学は、それを突き抜けて「貝おほひ」に爆発したのだ。これは無意識の軽みと思う。

我孫子日記

7/28~30*佐久平。 8/6京橋。 8/8手賀の丘公園。 8/15手賀沼蓮見舟吟行句会。

*蓼科山^{たてしな}も浅間山^{あさま}も雲の峰の中

高志

減反の棚田のありて蕎麦播種

調馬索終へし乙女ら馬洗ふ

道祖神まどふ衣の灸花

青棚田峯に達して峯を越す

五郎衛米作る青田の道走る

どの家も門灯のごと凌霄花

鋏持つは案山子の翁北信濃

みち

〃

高志

〃

みち

〃

編集後記

終戦記念日の蓮見舟は恒例の吟行句会になっています。以前より残暑がきつく、猛残暑という言葉があれば、当て嵌めたいような残暑中、蓮見舟は若干涼しさを感じながらの航行でした。句会後のビール歓談中に孝三さんから発せられた句に皆感動して、終戦記念日を修した。

茄子の馬馬一頭も還らざる（孝三）

ハガキ句 31 報は H・19 年の月見句会の句報である。

その前に孝三さんより高志とみち（敏子）の句についての感想を FAX にていただいていたものを掲載しました。過分のお褒めの言葉をいただいております。気恥ずかしい気持ちがありますが、その時の足跡その時の著者の感想でありますので、そのまま掲載しました。

ハガキ句は、現在新年のみを送っていますので、この俳誌がいずれ追いつくはずです。その日は H・28 年九月

であります。この日を目標に本誌の発行を続ける所存です。

白金霞八月号（第 30 号）…発行所 我孫子市南新木 2・14・17
編集・発行人 光成高志…電話（〇四）七一八七—一〇六八
表紙の題字…加納綾女。写真…白金霞